

## コラム2 生きる力を取り戻し、大規模災害を乗り越える

名古屋大学減災連携研究センターセンター長・教授 福和伸夫

4枚のプレートが押し合ってきた日本列島は、アジアモンスーン地帯に位置し、地震、火山、台風に始終見舞われる自然災害の百貨店ともいえる国です。そのおかげで、山や海に囲まれた風光明媚な自然、四季折々の風土に恵まれました。この結果、自然と折り合いをつけた独特な日本文化が作られました。

生活慣習の中でも、自然に逆らうことなく、災害危険度の高い低地や谷を避けたり、災害をいなしたりする工夫を凝らしてきました。農耕社会の日本では、梅雨時には、総出で田植えをし、秋には皆で稲刈りをし、豊作を祝って祭りを楽します。これが、地域共同体の持つ共助の力を作りました。日本社会が持っていた「生きる力」でもあります。

また、大家族の中で、年寄りと若者が助け合い、年寄りが若者にさまざまな教訓を伝え、若者が年寄りを支えました。田畑や井戸を持ち、かまど、灯明、汲み取り便所を使っていれば、各家庭には十分な自助力があり、災害時にも困りません。電気、ガス、上下水道が途絶えたら生きていけない現代とは異なります。厳しい自然と接していれば、心身も鍛錬され、個人の「生きる力」も育まれます。

江戸時代には、幕藩体制の下、各地域が地産地消の自律した社会を形成していました。このため、他地域の災害の影響を受けることはありませんでした。自律・分散・協調型の社会は、災害に強いレジリエント社会の基本でもあります。相互依存が強く、東京一極集中の現代とは異なります。

少子高齢化と人口減少の中、巨大災害の切迫性が叫ばれています。社会と個人の「生きる力」を取り戻したいものです。地域を魅力的にすることが地域力の基本です。そして、お祭りや子ども会を通して、共助力を育みたいと思います。

今や、携帯電話やスマートフォンの普及で、電話線が切れても通信できます。

## コラム2 生きる力を取り戻し、大規模災害を乗り越える

電気自動車やPHV車であれば蓄電も容易です。太陽電池と蓄電池を組み合わせれば、停電しても大丈夫です。水素社会になれば、燃料電池で発電できます。家庭菜園やキャンプを趣味にすれば、体力もつき、災害時の備えにもなります。未来の子どもたちを不幸せにしないため、いまどきの「生きる力」の獲得方法を考えてみてはどうでしょうか。

